

## 難波西鶴と

## 海の道

【57】

森田 雅也

閑話休題。前回は濟州島の話でしたが、再び西鶴作品に出てくる長崎の話です。

西鶴の浮世草子第2作目に『諸艶大鑑』(副題・好色二代男)「貞享元(1684)年刊」があります。「好色一代男」の主人公世之介の遺児世伝を登場させていますので、「二代男」ということになりませんが、世之介のように活躍しません。むしろ、三都の遊里の太夫の逸話を中心に構成された38章の短編集といえます。

そのため、この作品には、大

「尽」と呼ばれる、遊里で散財

できるほどの大金持ちたちがたくさん登場します。巻七の二「勤めの身は狼の切り売りよりは」には、神楽庄左衛門の語る昔話に興味深い大尽の逸話があります。

彼は、当時有名な末社(太鼓持ち)「でした。太鼓持ちとは遊里での宴会を盛り上げるためのコメディアンに相当しますが、太夫同様、大尽はその資金力によって、自由に有名な面白い太鼓持ちを自分たちの座敷に呼ぶことができ

ます。江戸時代に名前が残っている太鼓持ちは何人もいます

が、「神楽庄左衛門」は、タモリや明石家さんまのように、ハイセンスな笑いを提供できる大芸人であったと言えます。その彼によれば、黄金さえあれば、1日という時間でさえも、自由気ままに支配できるというのです。

格好の例として、以前に「長崎の唐人様」が、鳥原中の太鼓持ちを集め、「芝居がへりの籠籠、三十七挺、出口にかきつけ、阿足おろして、百足大臣と我に師になられた」という昔話を語ります。「諸艶大鑑」のいずれの注釈を見ても「長崎の唐人様」は未詳だとしますし、太鼓持ちたちを集めた行動も明確ではありません。

しかし、想像するには、「長崎の唐人様」と呼ばれていた大尽が、芝居がえりに乗る豪華で高価なかごを37台も借り切り、そのいずれにも多数の太鼓持ちたちを乗せ、出口に

## 「長崎の唐人様」

1列になってスタンバイさせ、芝居がはねると太鼓持ちたちは、かごから自らの足を出して歩き始め、大尽自らも「百足大臣」と称して、その先頭に立って歩いていったということではないでしょうか。

相当なお金をつぎ込んだ、あきれたパフォーマンズですね。ただ、「唐人」と言っても、当時は中国、阿蘭陀などいずれも長崎での外出や行動を制限されており、本物の外国人ではないはず。

おそらく、この「長崎の唐人様」という名こそ、当時、京都から長崎へ通い商いをしていた大成功、大もうけした、誰もが知っていた大商人の隠し名、ニックネームだったのではないでしょうか。次回、もう少し論証してみます。

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

# 誰もが知る隠し名の大商人